

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2021年6月 99号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com

http://keaf-japan.com



ロックダウンは解除、危機は続く

学校は休校、支援活動再開はなお不明

新型コロナウイルス封じ込めで優等生だったカンボジアでも3月以降、ついに感染が爆発的に広がりしました。私たち (KEAF) の現地での支援活動を支えてくれる旅行社経営・日本語ガイドのO・ソワンさんファミリーの一員、ナットさんからのレポートや現地報道によると、プノンペン首都圏やタイ国境に接する地域に出されたロックダウン (都市封鎖) は5月下旬には解除されました。政府はワクチン接種を進めるとともに、厳格な罰則付きの感染防止策の下に経済活動の段階的の再開を進めています。しかし、なお1日数百人の感染者が出ているようで、危機的な状況が続いています。

基幹産業の縫製工場は操業再開はしましたが半分程度、主要なマーケットの再開は認められたものの、庶民にとって毎日の生活の一部になっている規模の小さいマーケット、商店、露天などは休業のままだそうです。その中で教育機関は幼稚園から小中高校まで休校が続いており、私たちの現地活動再開もまだ見通せません。

支援プログラム再編成へ

高校生奨学金

高校生奨学金はカンボジア学校暦の新学年が始まる前の10月に前期分、翌2月に後期分と2回に分けて支給してきました。しかし、コロナ感染の広がりで2020年2月上旬に予定していた現地訪問が中止になって、2021年度の後期分奨学金の支給ができないままになっています。

さらに2020年11月からの22年度奨学生を選考する面接のための現地訪問ができなくなったために、奨学生を決められずに、プログラムは実施不可能となりました。この夏から秋口にかけて現地訪問ができないと、23年度奨学生さえどうなるか分からないという事態になっています (写真はロックダウン中の路上商店)。

教員養成所奨学金

高校卒業後に行われる教員養成所入学試験に合格した学生を対象にする奨学金は同様に2年間継続

して支給するものです。例年は2月の訪問時に初年度分を支給し、2年度分は7月の高校生面接の訪問時に支給してきました。20年度までの奨学生には2年間分支給済みです。しかし、政府は12年制の教員養成制度の4年制大学への改編を進めていて、21

年度学生の募集を取りやめたので、このプログラムは自動的に終了しました。

活動再開後の課題

現地支援活動が中断しているのに、ありがたいことに会員および支援者の皆様からはこれまで通りの活動資金を頂戴して

います。少し時間に余裕のできた高齢者が集まって始めた私たちの活動は15年目に入りました。私たちは、(失礼ながら) 支援下さった皆様とともに、ずいぶんと齢を重ねたものです。

この現実の下で現地活動が再開された後、数年間継続する奨学金中心のこれまでの支援活動をそのまま継続するわけにはいかないと考えています。支援プログラムの再編成に取りかかります。(金子)



【ナットさんのプノンペン報告】

初のロックダウンも

旧正月の「密」で感染急拡大

新型コロナの感染を抑え込んで、今年初めには職場も学校も通常通り再開されていたカンボジアは2月20日、状況が一変してしまいました。入国時に陰性とされて隔離施設にいた中国人旅行者が外出して、カジノやいろんな店を歩き回ったのです。ちょうど旧正月で、プノンペンに中国系市民が大勢遊びに来ていました。そこから中国人コミュニティに大規模な感染が広がりました。

3月11日に初めてコロナ死亡者が出ました。中旬にはカンボジア人にも次から次へ感染者が確認されて、特にプノンペンの市民が多く、芸能人や公務員にも広がりました。

マスクなし罰金 50 ドル

政府は感染防止対策法をつくり、午後8時から翌日朝5時まで外出禁止令を出しました。その規則を破ると罰金を払わされたり、酷い場合は刑務所に連れて行かれたりすることもあります。例えばマスクをつけないで外出する人は罰金 50 ドルです。

それでも残念ながら、感染拡大は止められなくて、一番心配されたことが起きたのです。縫製工場労働者の中とカンボジア人の生活に密着している市場の中で感染が拡大しました。

2週間のロックダウン

政府は4月14日、初めてプノンペンと隣のカンダール州を2週間ロックダウン、町は閑散となりました(写真上)。2週間経ってもある地区では感染者が減っていないため、ロックダウンが地域ごとに区別され、感染者がとて多いところはレッドゾーン、次に多いところはオレンジゾーン、少ないところは黄色ゾーンと指定されました(写真下)。

レッドゾーンとオレンジゾーンでは原則、家からの外出を禁じられ、違う色のゾーンを越える移動、

通行も禁止なので、日常生活に相当な不便を市民は強いられました。

経済不安で早期解除

感染者が一番多い時は1日1,000人近くになりました。5月下旬、感染者はまだ1日300-500人もいるのに、政府はプノンペンの経済をよくさせるためにロックダウンを全て解除しました。

ロックダウン期間中の感染者数はわずかに減少しましたが、6月7日月曜日の時点で34,833件の症例と266人の死亡が確認されました。感染したあと治った人は28,092人います。

ワクチン接種は 25 %

政府はロックダウンと並行してワクチン接種にも取り組んでいます。特にプノンペンの市民や縫製工場労働者、市場の人などの感染リスクの高い人を対象として接種を始

めました。予定した1千万人の25%が接種完了です。

マーケット再開は大手だけ

主要な市場とレストランは再開を許可されました。しかし、マスクをつけ、店舗に入る前に体温をはかたり、消毒したりすることが必要です。会社員は通常出勤できるようになっていますが、縫製工場労働者は従業員の半分しか出られません。セントラルマーケットやオールドマーケットなど大きい市場は

営業できますが、少し小さい朝早いマーケットは、まだまだ休業させられます。

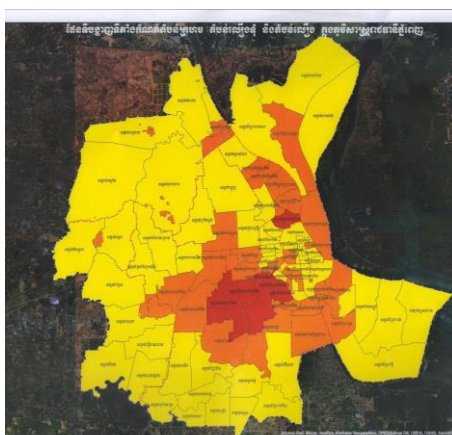
休校続く学校

教育省は3月21日、感染防止対策法に基づき小中高等学校の教育機関の全てで休校を指示しました。モバイルアプリを使用して授業をしたり、競争したりするなど、いろいろな工夫を取り入れています。

しかし、地方の学生に目を向けると、インターネット状況や資金

不足、スマートフォンやパソコンなどの電子機器を入手できない生徒は、もちろん勉強が十分にできません。勉強する気もなくなる生徒もいるだろうと思います。

特に高校生は10月に行われる国家試験が心配です。いつ学校が再開するか今は読めません。



《コロナ1年5カ月の日常》

予約お手伝いは無事終了

石山 路子

5月初めに新型コロナワクチン接種券が届いたので、早速、主治医の先生の所へ。「遅くなるけれど必ずしますよ」のお言葉にひと安心。でも周囲では電話で予約をするしかないと言う友人も。

お節介心？が頭をもたげ、頼まれもしないのにネット予約を引き受けました。まずは友人の分を取り、地方に住んでいる従姉の分を取り、掛かり付け医が住所地外の親戚の場合は「住所地外接種届出」を出せば受けられる事が判り、こちらも無事予約完了。

残りは6月に入っても予約が取れない友人夫妻の分。あいにくその日は電話予約のみの受付。私は降りました。

しばらくしたら友人から「繋がらないので今日は諦めました」との電話が。諦めきれないのは私の方。朝刊を読みながら右手でスマホの電話を押す事731回、やっと電話が通じて2人分の予約が無事終了。これで予約のお手伝いはおしまいです。

ウォーキングマップで散歩

岡宮 喜雄

コロナ禍での緊急事態宣言、ワクチン接種の混乱、オリンピック・パラリンピックの開催？など世の中一体どうなっているのでしょうか。

外出自粛のため遊び心で続けているラグビーの練習、練習後の飲み会も出来ずストレスが溜まるばかりです。最近では中野区発行のウォーキングマップを参考に寺社仏閣、公園巡りなどで気分転換をしています。

ワクチン接種は1回目は終わりましたが副作用もなく、2回目がまだなので 気が抜けません。オリ

パラは賛否両論が飛び交っていますがあまり興味がありません。1日も早くマスクを外した普通の生活に戻ると良いですね。

野鳥を餌で呼び込んでいます

内田 義博

庭先にキジバト、シジュウカラ、メジロが、最近寄ってこなくなったので、毎日餌をやり呼び込んで楽しんでいます。

キジバトはドバトと違いペアで現れ、糞はいた

しません。シジュウカラは時にはナブラ(群れ)をつくりませんが、今は2匹ペアで餌を食べにきます。餌はヒマワリの種です。

メジロが好んで食べるイワツルウメモドキ(写真)。昔は山に沢山生えておりまして、秋になるとこのような赤い実がはでくり(はじけて出てくる・伊豆の方言)ます。

これをメジロが好んで食べます。最近では全く見か

けなくなりました。聞くところによると、生け花に大変人気があるようです。メジロ愛好家にとってはこまったものだ。



「怪盗ルパン」伝説で挑戦

池内 秀樹

「なぜ中国は、国際ルールを無視してまで強引に自国の影響力伸長を図るのか」「なぜ米国ではトランプ前大統領のような人物が登場してくるのか」―世界の歴史の転換点となるかのようなこれらの現象を、大いなる疑問にとらえ、もっぱら、アメリカ史、中国史を遅まきながら勉強中です。

「怪盗ルパン」をフランス語で読もうと思ひ立ち、錆びてしまって脳みその一部にこびりついたフランス語とも格闘中。(次頁に続く)

(前頁からの続き)

半過去、単純過去、複合過去、どうやって使い分けるんだっけ。目が衰えてきて長時間の読書に堪えられず、ちょっと読んで休み、またちょっと読んで休み、だらだら読書をつづけています。

やや根暗な、室内運動用の自転車漕ぎ、近所のプールでの水遊び（泳いでいると言いたいが…）も定期的にやっていますが、足の衰えは葦のごとく頼りなく、いかんともしがたい。夕方のグラス一杯のウイスキーがなんとも旨い。時々の日本酒、ワインも少々。

IT・AI で人流を抑えた開催

山田 伸代

新型コロナウイルスが世界中でまだパンデミック状況にある中、最大の関心事は、2020 東京五輪の開催をどうやって感染拡大リスクをマネージして開催できるかです。

選手をはじめ報道陣や観客に厳しい規制をがんじがらめに課しても、苦しさが楽しさを台無しにしてしまうのではないかと不安になります。そうすれば何のためのオリンピック・パラリンピックなのかが分からなくなってしまいます。

素人考えですが、IT、AI 技術がおどろくほど進歩している中で、オリンピック精神を 2021 年流に「人流を抑えて」活かす方法で、今年ならではの知恵を働かすことはできないでしょうか。

例えば、開会式も IT、AI を駆使した日本発のユニークな動画で SNS も含めて全世代に伝わりやすい形で発信するとか、具体的に移動が禁じられている国からの選手の参加は、種目によっては各国現地でリアルタイムで競技をし、記録を計り、正式に採用することはできないか。「例外だらけ」の開催を考えて頂きたい、といつも考えます。

そして、今だからこそ、楽しみと、興奮と、勇気と、愛情を、日本発で世界中に届けることができたらそんな素晴らしいことはないと思います。

どうか聡智をもって可能性を追求していただきたい。

土壇場の底力を発揮して！！

頑張れニッポン！！

リハビリに努めています

久保田 信一

幸いコロナの訪問は今のところありません。ワクチン接種 2 回目を待っているところです。

その代わり？パーキンソンが押し掛けてきて居着いてしまいました。毎日、小舟の上でゆらゆら揺れながらの生活のようです。

週 2 回のリハビリ、隔週の訪問看護。それに歩行訓練、2 本の杖を使う 4 足歩行の自主訓練です。会報の発行のお手伝いすらできないふがいなさ。残念です！

「自粛」と「責任」

金子 敦郎

沖縄がコロナ感染でも本土につけを回されて酷い目に遭っています。「自粛」のフラストレーションが溜まった本土のみなさんが、連休に息抜きを求めてどっと観光に押し寄せてコロナ菌をばら

まいて帰ったからです。

コロナ対策では自由と民主主義の本場のはずの欧米の方が厳しく「規制」を課したのに、日本ではひたすら「自粛」をお願いするばかり。だらだらと感染拡大を長引かせてきました。お願いとなると、自分は感染しないから自

粛は嫌、自己責任だという人が出てきます。特に感染・重症化の可能性が低いといわれた若者に多かったと思います。

しかし、「自粛」には自分が感染するかもしれないだけでなく、感染者になって他人に感染を広げてはならないという重い責任が伴っているはずで。欧米の厳しい規制には補償がセットになっています。日本政府はそれが嫌だったのでしょうか。出し惜しみは、結局は高くつくのに。

(写真：病院入口のマスク着用掲示)



蘇ったパイリンの記憶

ジャングルを2日間歩き続ける

安尾 芳典

新型コロナウイルスによる緊急事態宣言で外出が思うようにできない中で、27年前にカンボジアのジャングルを2日間、歩き続けた体験がふと、蘇りました。

ポル・ポト派掃討作戦取材

カンボジア政府軍が目指す先は、反政府ゲリラ勢力ポル・ポト派の本拠地パイリン。タイとの国境地帯にあり、ルビーの産地として知られ、ポト派の資金源になっていました。1994年3月、政府軍はポト派掃討のため、パイリンに向けて攻勢を始めたとの情報を得て、バンコクからカンボジアに飛びました。

水も食料も持たず

飛び乗った

政府軍の出発地バタンバンからパイリンまでの80キロの間には、ジャングルがはだかる。その中を、革靴にワイシャツ姿で水も食料もなく、政府軍の軍用車にとにかく飛び乗ってしまったのだ。

ポト派からの砲声が鳥の声に交じって時折、遠くで響く中、政府軍についてジャングルを黙々と歩き続けました。一行には日本やフランスなどの記者も。密林のお蔭で厳しい直射日光は避けられたが、食料も水もありません。疲労困憊で意識がもうろうとする中で、なぜか生ビールやカツ丼が頭の中をぐるぐると回るように浮かんできました。

ハンモックから転落

食料や水を政府軍兵士に金を払って分けてもらってなんとかしのぎました。夜寝るときは、兵士のハンモックを借りましたが、このハンモックに乗るのが意外に難しくて、何度も落ちてしまい、

そのたびに兵士に笑われてしまいました。

立派なジャングルの「首都」

2日間歩き続け、ようやくパイリンに着くと、ポト派はもぬけの殻で、不気味に静まり返っていました。戦術的に撤退していたのです。パイリンには学校や病院が立ち並び、シアヌーク殿下用の豪華な迎賓館もあり、政府軍側の支配下の町よりも立派なのに驚きました。

原稿を送るには、またジャングルを抜けてバタンバンまで歩かなければならないと思うと力が抜けました。幸いにも政府軍ヘリが到着していることを知り、記者たちは一斉にヘリに向けて殺到。

間一髪でヘリが浮上する直前に滑り込みで乗り込みました。ヘリが2、3メートル浮上したところで飛び乗る同僚記者もいて、彼の腕をつかんで引っ張り上げました。



うまかったビールとカツ丼

バタンバンに着くと、仮設の電話局に飛び込み、東京の本社に原稿を送稿送。小型の電送機も苦勞して持参して行ったので、写真も何とか送ることができました。その後に浴びるように飲んだビールがうまかったこと。カツ丼はバンコクに戻って食べました。

(写真：カンボジア西部、コンポンスプー州山岳地帯のジャングル)

ありがとうございました (2021年3月2日～2021年5月31日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に厚くお礼を申し上げます(敬称略させていただきます)

(埼玉) (東京) (秋田) (東京) (東京)
(東京) (東京) (東京) (東京) (神奈川) (東京)
(神奈川) (東京) (福岡) (千葉) (東京) (東京)
(埼玉) (神奈川) (東京) (東京) (大阪)
(千葉) (神奈川) (東京) (神奈川) (静岡) (東京)
(神奈川) (神奈川) (神奈川) (埼玉) (東京) (富山)
(埼玉) (東京) (神奈川) ※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています。

◇物品支援ありがとうございました

様 (東京) : ハンドバッグ 4

◇著書紹介

『そして 待つことが 始まった
—京都 横浜 カンボジア—』

筆者 : 石山 陽子 (養徳社刊、1500 円)

カンボジア戦争中の 1973 年クメール・ルージュ支配地域の取材に入った共同通信プノンペン支局長の石山幸基記者は、そのまま消息を絶ちました。本書は同記者の妻・陽子さんの 37 年にわたる夫捜索記です。



石山記者との連絡が途絶えてから 1 年半後、クメール・ルージュが全土を制圧、ポル・ポト政権の恐怖政治を経てカンボジアは長い内戦へ突入します。

この内戦直後の「幕間」となった 1981 年、陽子さん、お母さん、お兄さんが加わった共同通信現地調査団が石山記者の足どりをたどり、ゲリラ基地滞在中に病死した同記者を看病し、看取った女性と奇跡的に出会いました。

内戦終息までさらに 27 年、2008 年に現地調査再開、翌 2009 年に陽子さん、長男健吉さん、当時の共同通信インドシナ戦争担当記者(KEAF の池内と金子)、プノンペン支局プイ記者の調査グループが西部山岳ジャングルの奥深いゲリラ基地に到達、石山記者がそこの共同墓地に埋葬されていることを確認しました。この現地調査の長い旅のルポが本書の主題です。

「戦争特派員の墓場」といわれたカンボジア戦争。1970 年 3 月の戦争勃発から同年末までに世界各国からのジャーナリスト 26 人、戦争終結までの 5 年間では 37 人が命を失いました。その戦争取材を生き抜き、今は年老いた各国の元戦争特派員と家族ら 50 人ほどが 2010 年プノンペンで再会、失った仲間を悼み、旧交を温めました。代理出席した陽子さんは歓迎され、石山記者の思い出話が行き交いました。このベテラン戦争特派員たちのセンチメンタル・ジャーニーのルポもハイライトです(購読のご希望は下記へ : sk-akaneko35@outlook.jp, 03-3418-7003 金子敦郎)。

ピセットちゃん、元気いっぱい

夫妻の仕事中は祖母に預けます

コロナ禍のさなか、2 月に生まれたナットさん、ミランダさん夫妻の長男、ピセットちゃんは 3 カ月半を過ぎました。ナットさんによると、ピセットとは最高、完璧という意味で、その名の通り元気いっぱいに育っています。パパとママの顔を憶えたようで、ニコニコとよく笑ってくれるそうです。



カンボジアでは母親の育児休暇が 3 カ月なので、ミランダさんは 1 週間前から仕事に復帰しています。ピセットちゃんは朝、おばあさんの家に預け、午後 5 時に夫妻が引き取ってくるという毎日。コロナ不景気のもとで子育ても厳しいのですが、ピセットちゃんの笑顔に力づけられているとナットさん。